

# 王様の席

松本永彦

「ふうん、これが約束手形なのかい。うまくできてるじゃないか。いったい何に使うんだ」  
私は手に取った一枚の紙片を眺めていった。信也は小学生の頃から絵とか工作で、いくつもおおやけの賞を取っている。

「お父さん、本物ってこんなものなのか」

「さあ、見たことないんだ。うちの商売にはまるで関係ないから、こんなものだろうな」  
高校生の次男の信也は、この頃急にお洒落になって、服装にうるさくなった。

親から貰う衣料費だけでは足りず、正月のお年玉からバイト代まで注ぎこんでいる。

「いいコートがあるんだけど、どうしても欲しいんだ。お金だしてくれないかなあ」

「駄目だな。おまえだけに買う訳にはいかない。だいたい高校生がだね。服装ばかりに……」  
信也はそんな時には怒りだすか、無視して何も聞こうとしない。

兄の建夫は服装よりも、機械いじりが好きな方で、音楽関係の機器に次々とバイト代を注ぎこんでいる。

どちらがよいのか、私にはよく分らない。

信也は母親と交渉してお金を都合させたいらしい。約束手形は母親との契約で振り出したのだが、金額、発行日、返済期日、振り出し人などきちんと書いてあり、拇印も押してある。

「立派なものだ。印刷したようじゃないか。ところで、利子はどうなっているのかね」

私が裏を見ようとすると、妻がひよいと取ってしまった。

「お父さんは関係ないの。私と信也の約束なんだから。きちんと利子も決めてあります。期日に返済できない時の条件もね」

「さすがお母さんだね。一月は店の方も暇だから、よろしく頼むよ」

子供たちから無理にといわれれば、何とかしてやりたいと思うし、その分だけ月末は家賃の支払いなどで苦しくなる。

駅から十分ほど歩いた私鉄沿線に、私は二十年近く理髪店を経営している。年間収入の大体定まった現在、三人の子供が大学高校中学と育ってきて、学費や養育費はかさむ一方である。世間並に智慧を働かせてのやりくりで、どうにか借金もせずにしっている。

開店以来、わが家の大蔵大臣は私である。店の経営の中心となつて以上、というのは名目で、実際は同じように働いているので、男女同権ならぬ夫婦同権である。

ただいつの間にか、そうなつてしまったという訳で、反対に奥さんが一切の経営から金銭の出し入れをやっている店もある。

子供の小さい頃は、大蔵大臣のメリットもあったが、学費のかさむようになった最近では、ただわずらわしいばかりか、頭を悩ますことばかり増えて、何の得もなくなっている。

結婚以来、わが家の緊縮財政は妻の多大の協力もあって、ほればれるほど見事なものである。それは子供たちが証明してくれる。

「うちはこれなんだからなあ。友達の家から見ると、かなり決定的な差があるよ」

中学の頃の長男の建夫が、よく慨嘆するようにいつていたのも一度や二度ではなかった。しかし、その響きにはかなしさはない。

「うちにはうちのやり方があるの。ほかの家との比較で生活しているんじゃないの」  
妻はきつぱりと自信をもっている。

「必要なものとか、買うべきものは買ってあげている。不自由なんかさせてないでしょ」  
そういわれれば、子供心にも文句はいえなくなるらしい。

うちはうち、世間は世間である。どういうものかこの問題に関しては夫婦の意見は一致している。しかし、そのほかの問題は夫婦不一致である。職業観、社会的関心、対人関係から趣味、料理の味付けに至るまで、これほど正反対の夫婦はあるまい、というのが私の意見である。だから性格の不一致で夫婦が離婚とかいうのは信用できないと思っている。

お金に関して、最初ここに開店した時は、まるつきりおけらだった。日銭がとれる商売なので何とか食いつないだが、美江は万一の時を考えて、田舎の農家をやっている親友に、いざ

という時はおいもを送ってほしいと頼んだほどだった。

店の経営が安定してくるにつれ、初めの不転の決意は大分薄れてきた。子供が二人になり三人になり、共稼ぎの店は奥と店とでいつも混乱とごったがえしの中に、一日がいつの間にか暮れてしまう。

商売をやっている店屋の奥は、狭くて混雑しているのが普通である。

「奥の部屋はどの位あるの？」

「二部屋ある。大きい方は六畳だ」

「ええ、六畳もあるの、本当？」

店を借りる前、下見から帰ってきた時の私と妻の会話である。

私は以前、店をもった友人の話で、奥の部屋が三畳でおもちゃのような台所が付いているのを聞いた。店の立地条件を中心に置けば、私生活は極端に切り詰められる。

「赤ん坊が生れたら、どこに寝かせるの？」

「たんすの上か押入れに置くんだよ。それが現実の厳しさというものだよ」

「六畳でよかった」

妻はほっとため息をついてうなずいた。

とにかく、こうして商売が始まった。一日の大半を店で過すのが理容師の生活である。寝る時と食事の外は、余り部屋は使わない。もつとも休日は使うことになるが、私はいつも外出し

てしまうから部屋は寝るだけだ。

もう一つの部屋は台所兼食堂である。三畳といっているが、台所の分を引けば正味二畳の板張りの部屋で、その隅がトイレである。

最初の頃、隣の六畳で食事をしようとしたが、どうも不便である。理容師の食事は作るのも食べるのもスピードを要求される。結局、台所の二畳に食卓を置くことに落ち着いた。

ところが困ることが幾つか生れた。台所に冷蔵庫やガス炊飯器を置くと、更に人間の居住区は縮まり、食卓に全員が座るとトイレのドアが開かなくなってしまう、六畳へいく通路もふさがってしまうのである。

「こんなところに、よくもトイレを付けたもんだよ。非常識にも程があるぜ」

私はこの家屋の設計に文句をつけてみるが、それを承知で借りたものだからそれ以上はいえない。

「六畳の方で食事をするのが常識なんですよ」

妻はあくまで常識派である。

「サラリーマンならそれでいいだろう。ゆつくりお食事いたしましょうでね。子供もまだ小さいし、まあ狭くても我慢するか」

食卓のうち、六畳に面したところは仕切りのガラス戸になっている。そこにはカレンダーや、幼稚園や小学校のメモやプリント、また日程表などがぶら下っている。

そして、空いている三面に親子五人が座って食事するのである。押し合い肩を付け合い、仲良く食事するのもまた楽しい。

といっても、実際に五人が同時に揃うことはまずない。食事の時間は総て店と学校の都合と  
いうか、必要性に合わせて組立てられている。

開店時間が九時であり、幼稚園と小学校はそれぞれ異なっている。昼は給食や弁当もあり、夜もまず店と子供の食事時間がぶつかることばない。うまくしたものである。

三人目の赤ん坊、和代が生れた時、六畳に二段ベッドを入れた。親子五人一面にふとんを敷いて寝るには狭すぎた。赤ん坊は妻が添寝するにしても、二人の男の子がふとんの上で暴れる危険を考えたのである。

「建夫、おまえば上で寝ろ」

「え、上で、ぎしぎし揺れるんで怖いなあ」

「お兄ちゃんは下で寝なよ。ぼくは上がいい。高くて何だか面白そうだなあ」  
冒険好きの弟の信也は、テレビの子供向のアクションを想像しているらしい。

「信也が上でもよいが、いきなり飛び下りたりするんじゃないぞ」

どこまでいっても赤ん坊の心配ばかりしている。

「信也もそうだけど、その梯子も危険じゃないの。外れないようにくつつけたらどう」

妻が今度は別の心配をしている。

確かに梯子も危ない。倒れて赤ん坊を傷つけないとも限らない。

「くつつけると通るのに邪魔になるよ。かえって無い方がよさそうだね」

梯子はベッドの真下に押しこんでしまった。信也峰ヘッドの角の手すりに掴まって、猿のように上り下りする。そのうち上段から畳の上に飛び下りたりするようになった。

日中は下段のヘッドに赤ん坊を寝かせることにした。冬の六畳は一日中陽が射さないので、冷蔵庫の中のように寒い。小さな電気ストーヴを灯けつ放しにしておくことにした。

私たちが店で仕事している時は、心配なのでたまに部屋に見に上る。信也にもいいきかせてあるが、幼児のことで安心できなかった。

三月になれば六畳の窓際に、僅かながら陽が入って部屋が暖かくなる。春を待ちかねた。

そんなある日曜のことである。朝から忙しく仕事に追われて、いつの間にか昼近くになっていた。妻は昼食の仕度もできそうもなかった。その時、赤ん坊の泣き声が聞えた。

私は何か異様な匂いを感じていた。丁度、妻の客が終わったので知らせると、妻はすぐ奥に飛びこんだ。妻の叫び声と物音に、私も客を放りだして続いた。

部屋一面の煙だった。仕切りのガラス戸を閉めておいたので発見がおくれた。電気ストーヴがうつぶせに倒れていた。旧式で安全装置がないので、まともに畳をこがしていた。

「早く気付いてよかった。信也よ。ストーヴを蹴とばしたまま、外にとびだして行って」  
赤ん坊を抱き上げてあやしなから妻はいった。

畳表を一枚取り換えただけですんだが、その精神的なショックは、益々、子育てに慎重になつていった。

信也を外にだしても、交通事故の危険があり、家の中でもボヤ騒ぎである。

「腹をくくるより、しようがないようだね。できるだけ注意して、後は運に任せるか」

「小学校へ通うようになれば、何とかなるでしょう。信也は活力がありすぎるのよ」

どこの家庭でも長男より次男の方があばれん坊である。長男の建失は幼児の頃に、私の母親に育てられた。いわゆるおばあちゃん子で、少し神経質なところがあった。

次男は育て方が違う。私たちが仕事で手いっぱいなので、赤ん坊のときから手をかけず育ててきた。身体の成長も早く、智能も親馬鹿の目には進んでいるように見える。

ところが勢い余つてしばしば脱線することが多い。反抗期という奴である。口でいってもきかないから、奥に引つ張りこんで殴る。

「頭をやらないで、お尻にしてよ！」

妻が悲鳴をあげる。私自身も夢中になっているから、理性もへったくりもない。感情で握り拳を振るつて頭を殴りつける。手加減しなかった。

興奮が治まってみると、私の手は張れあがつて痛かった。子供の頭の固さと、手の痛みと私

の心もひりひりと痛みを訴える。いろいろな後悔が私の胸をいっぱいになっている。

少年の頃、父親に殴られた時を思いだした。強情で反抗的で、自分が悪いと分っていないながら、尚も我を張って父親の拳を受けることが、男らしい行為と思いきんでいた。腕でかばうこともせず、頭中コブだらけになって耐える快感もあった。

「恐いのよ。今の子供は。頭を打たれて死んじやう子だっているのよ。昔と違って何もかも弱くて、どこの家でも頭を避けているようよ」

妻の真顔を見れば、私もやりすぎたかと反省する。

「うちの子供は大丈夫だ。石頭だからな。こっちの手の方がしびれる位だ」

「そんなに力を入れてぶつの。考えてみてよ。相手はこんなに小さい子供よ」

妻の気持は分るが、私は手以外のもので打ちたくなかった。アメリカのヘアブラシというのを聞いている。尻をぶつのだそうだ。その方が楽だが、親は手の痛みを感じはしない。

「おい、信也、風呂にいこう」

店の仕事が終えて、うとうとしかけている信也を誘い隣の風呂屋にかけた。信也の気の変り方は実に早い。親父にこっぴどく叱られたのを直ぐに忘れたかのように、今までにこにことテレビを見ていたのだが。

久しぶりの父親との風呂である。隣なのに手をつないで、ノレンをはねて男風呂の戸を開ける。

「親分！今日はお父さんと一緒かい、珍しいね」

番台のおかみさんが声をかける。親分というのは信也のあだ名である。いつも妻と女風呂の方に入るのだが、機嫌が悪い時は大声でわめき散らし、えばっているのですんなあだ名をつけられたらしい。

裸になると丸っこい身体をしている。肉付きがよいのだろうが太ってはいない。

丹念に信也の身体を洗ってやった。昼間の罪ほろぼしの気持もある。一緒に湯船に入って馬鹿なことを思いついた。

「信也。こおまえ、ここから抜けられるかい」

「どこからだよお」

「お父さんが子供の時、よく潜り抜けたものだ。こっちから深い方に潜ってみろ」

古い風呂屋なので、二つ並んだ大小の湯船の境が板で区切つてある。板の底の方に三十センチほどの隙間が空いている。

「そっちは深いから、恐いよう」

「大丈夫だ。お父さんがそっちで見張っているから、安心して潜ってこい」

私が深い湯船に入り、親子の顔が向い合うと、信也は決心がついたらしく頭から一気に潜つた。とたんに尻が浮び上って失敗した。

「近すぎると駄目だ。少し下って底の方から板に近づけ」

信也はその通りにしたが、今度は板の前で顔を上げてしまった。呼吸がせわしかった。

「できないよう。狭いし苦しいんだから」

「いやできる。苦しくつても我慢するんだ。頭を入れて肩からでるんだ」

私も夢中になってきた。子供の頃の風呂屋と違うかも知れないし、信也も稚なすぎるかも知れないと思つたが、いいだした以上、信也に成功させたかつた。

湯船の客が増えて、興味深そうにこつちを見ている。

「いいか。できてもできなくても、後一回だ。頑張るんだ！」

信也とタイミングを合せて、深い湯舟の下の方を両手で探つた。信也の頭らしきものが見え、両手が隙間からでたり入ったりしている。なかなかでられないのか、気泡が上ってくるので私にはあわてた。信也の片手を掴んで深い湯船に引つ張りこんだ。鈍いショックがあつて、信也の身体がぼかりと浮び上つた。

「うわあ！」

信也は絶叫とも泣くともいえない叫びを上げて、私に力いっぱい抱きついてきた。

風呂屋をでる時、私は信也に口止めしておいたのだが、妻は知つてしまった。頭のコブではれたらしい。

「何やらせたの、湯船のお湯を呑んだんだって。病気にでもなつたらどうするの」

「病気なんかなるものか。信也はすごいことができるようになったのさ」

母親は子供の怪我や病気を恐れる。妻は食事の質とか栄養にいつも神経を使っている。とはいっても、我が家の食事にかける予算は世間の普通の家庭より少ないだろう。それをやりくりしながら、栄養のバランスのとれた食事をつくるのが妻の腕というものだった。

昔、栄養学の勉強をしたというだけあって野菜、肉、魚、果物と、安いものでも品数とバラエティに富んだ食事がでてくる。

「食事は理屈じゃないだろうな。栄養学の有名先生の子供は、どういうもんだかひ弱そうな気がするんだがねえ」

「そう、結果が総てよ。うちの子供を見て、達夫だつてまだ学校を休んだことないし、信也だつて体格もいいし、元氣いっぱいでしょ」

二人の男の子が健康なのは確かだったし、妻の自負もうなずけたが、私は別の面で気になるものを感じている。親は子供にどうしてこう完全さを求めてしまうのだろう。

建夫に剣道をやらせたのもその理由からだつた。まだ幼稚園児だつたが、近くの剣道場に入門させた。

丁度、小学校六年生の男の子と母親がきていた。

「ううん。六年生位に剣道をやり始めるのが、一番上達が早いですよ。え、まだ幼稚園に行つてるんですつて」

剣道教師のあきれたような顔があつたが、それでも入門を許してくれた。年長組とはいえ、

五歳の建夫を見るにも頼りない稚なさがあるのだが、妻は自分からいいだしたせいもあって、週三回、夕方から二時間の稽古にせつせと見学にいった。

男らしく強くりりしいわが子を夢みるのか、黒い袴の稽古着を身につけ、しないを振っている子供たちを見ている母親は多いものだ。

私も仕事の隙をみつけて、見学に行くこともあったが、やはり父親としても、自分の子供の稽古ぶりは大いに気になるのだった。

やがて冬に入って、新年の寒稽古になると、早朝の五時、真暗な闇について剣道場に通わなければならぬ。最初のうちはともかく、何日かすると起せど起きぬようになる。

私は妻と建夫の争う言葉を、寢床の中で毎朝聞かされるようになる。氷点下何度という中を稽古着の上に分厚いはんてんを着て、駆けだしていく建夫の足音を、目覚めてしまった頭の隅で聞く。

妻は寒稽古を見にいかなかった。一度位はいったかも知れないが、妻には妻の考えがあるのだろう。毎日の仕事があるから、サラリーマン家庭の母親とは訳が違ふ。

「今日、同じ剣道にいつているお母さんにいわれちゃった。あんなに小さな子供を、一人で寒稽古にだしているお母さんで、きつと中年過ぎのきつい顔をした人だろうって、そしたら、まだ若いお母さんなので、びっくりしちやったって」

泣き泣き通った建夫が、打上げの朝、鏡開きのおしる粉を食べるお椀と箸をもって走った。

帰ってきて精勤賞を見せる建夫の紅潮した顔と、私にも見せたことのない妻の喜悅の表情が向い合っていた。

春が近づく、朝の寢覚めに陽の光を感じる。六畳の窓ガラスが陽に輝いている。二段ベッドの子供たちも、畳のふとんの和代も、まだ寝静まっている。

妻だけが起きて、台所で食事の仕度をしている。その物音を聞きながら、私はまだ夢の続きのような頼りなさと、また日常の生活感覚との境をうろついている。

朝の食事時間になると状況は一変してくる。

いつの間にか、三人の子供たちの間で座席の名前がついた。一番上等の席は、テレビに近くて寄りかかりのある「王様の席」である。

この席はチャンネル権もあるし、どんと構えて身動きする必要がない。ところが「女王の席」はテレビを真正面から見る利点があるが、通路になっているのと、台所や冷蔵庫のものを運ぶ役目がある。これは一応、妻の指定席である。

次の「家来の席」は、冷蔵庫の角に寄りかかることができるが、食卓の角と六畳との通路で、人が通る時は一々前へ身体を倒さなければならなかった。

そして最後は「奴隷の席」である。トイレに近いばかりか、テレビが半分しか見えない悪条件で、誰もが座りたがらなかった。

「王様の席」はまず私の指定席なのだが、私がいなければ誰もが座りたがったが、子供たちだ

けの時は、たいてい長男の建夫が座った。

建夫がいなければ信也が座る。二人の男の子がいなければ和代が座った。

生れた順に序列が決っているのは、別に誰かが教えた訳でもなく、いつとなくそうなつてしまつたのである。

「おい、建夫、どいてくれ」

私は「王様の席」に座っている建夫をどかせて食事をする。建夫より私の方が偉いのである。仕事のために食事をする。一つのわが家の暗黙の承認ができていた。手の空いている時間にか食事をするのができない。子供心にも分つてきているのだろう。

働いている者が優先するのである。

いつか、家族旅行の時に、こんなことがあつた。シーズン・オフの高級旅館に泊つた時のことである。滅多にそんなところには泊らないのだが、通された部屋には、立派な床の間がついていて、山水の掛け軸が下り、高級そうな壺が飾つてある。

夕食の時、二つの大きな食卓を合せて、一面に豪華な料理が並べられたのだが、信也がいきなり床の間を背に座ってしまったのである。私は信也にいった。

「おい、信也、そこは床の間だぜ。おまえが座るところじゃないよ」

「なんでいけないの」

信也はげんそうにいうが、無理しなかつた。わが家はおろか、どこへいっても床の間なん

てないし、その意味など分らないだろう。

「一番の目上の人が座る場所なんだよ。うちでは王様の席なんだよ」  
信也は納得したようにうなずいて立ち上った。

四月だが店が暇なので、私はぼんやりと腕組をして外を見てみると、後から信也が叫ぶ。

「飛びつき練習してよ！」

店と奥の境は一段高くなっている。信也は両手を前に突きだし、腰を少し落して身構えている。

「また飛びつき練習か。疲れるなあ」

「いいじゃないか。どうせ暇なんだから」

「どうせはないだろ。暇だってお父さんにはやることが沢山あるんだよ」

「また勉強だろう。いいかげんにしなよ」

信也は言葉に鋭いところがある。幼児なのに子供らしくないといわれる。私も少し気にかかっている。

店の片隅に私の書きものをとする場所がある。

鏡の前の、カップや鉄やレザーを置いたための、三十センチ幅の棚である。

私はそこで暇な時間に、いろいろ書いたり調べ物をしたりする。店の帳簿の整理も、日記を

つけるのもここでやる。

何をやっていても、子供の目には勉強に見えるのだろう。

「そんならやってやろうじゃないか。今度は一メートルだぞ。こわいだろう」

私は信也の挑戦を受けることにした。信也の立っている位置から、一メートル離れていった。飛びつき練習というのは、私の考案した単純な遊びである。飛びついてくる信也を、私が両手で受けとめるだけである。

三人目の長女の和代が生れてから、信也はどういうものか私にくっついてくる。

「もう少し前にきてよ」

「何だ、こわいんだろう。この位か」

私は少し信也に近づいた。信也はいきなり飛びついてきた。頭と胸がまず私の胸にぶつかり、次で股と足がからみつく。強烈な打撃である。落ちる瞬間に、私は両腕で強く抱き締める。肉付きが一段とよくなり体重も増してきたのが分る。

「もう一度やって！」

再び境の位置に戻り、同じことを繰り返した。ずしんとする力感と、抱き締める瞬間、信也の髪の毛特有の甘い匂いがする。

五、六回飛びつき練習をやって、私は少し疲れたが、信也はもっとやりたがっている。

「もう駄目だ。疲れたよ」

私は降参することにした。

建夫が幼児の頃、飛行機というのをやったのを思いだした。私はまだ少しだけ若かった。

その頃は、初めて子供を得た喜びもあって、よく駒沢のオリンピック公園や、砧の大緑地公園に親子三人で遊びにいった。旧ゴルフ場だった砧緑地は、広い平坦な芝生の続いた手頃な遊び場だった。

ボール遊びにあきると、建夫の両手を取って円周を描くように振り回した。最初は釣り下げの形から、次第に建夫の小さな身体が浮き上って空中を飛ぶようになる。

「もう止めてよ。肩の関節が外れちゃうよ」

妻がこわがって叫ぶまでやった。

私の目も回ってしまって、建夫と一緒にふらふらと芝生に崩れ落ちる。

子供たちと素直に密着できるのは、「幼児の岩」の頃だけだろうと思う。

建夫が小学校に入学して、親と遊ぶよりも友達と一緒に遊ぶ方を好むようになってきた。

夕食の時間まで帰ってこない。どこにいつているのか、妻は知っているのだろうか、私は店の仕事や自分の用事だけに注意力を絞っていた。

そのうち、信也も一緒に連れて遊びにいつてしまう。夕方になって手足や服を汚して帰ってくるのを見れば、おおよそのことは分かった。

この四月に建夫は二年生になった。信也の満三歳の誕生パーティーをやった。一歳の和代と

一緒で、小さなケーキの上に、ロウソクを四本立てた。

次の日の午後だった。昨日辺りから急に気温が上りはじめて、まだ四月なのに六月頃の暑さだという。建夫は小学校から帰ると、すぐ友達の家にでかけてしまった。

暑い割に店は暇だった。私は従業員の石田と雑談したり、ぼんやりと新聞を眺めていた。電話の音がして、妻の応答の音が聞えた。

「早くいつてみて！建夫が事故に会ったって、沢口さんの近く、公園通りだって」  
妻の甲高い声に、私の頭は一瞬、きゅんと引き締ったかのように緊張していた。

私は自転車をとばしながら、いったいどんな事故に会ったのか、正体が分らないばかりに無暗とスピードを上げていた。

現場で知人から建夫の交通事故と、行き先の溝口外科病院を知らされ、また私は突っ走った。入口に救急車が停っていて、玄関の左側の部屋に建夫ともう一人の子供が、診察台に寝かされて手当を受けていた。建夫の同級生でいっぺんにはねられたらしい。

二人とも顔色はよくないが、意識がはっきりしているので少し安心した。警察官に住所氏名など訊かれているうちに、建夫はどこかへ消えてしまった。レントゲン室にいつているらしい。私は妻に連絡の電話をかけた。

「建夫は生きています。死んじやった！」  
いきなり妻の声が目にとびこんできました。

「生きているよ。大したことはなさそうだ。意識ははっきりしている」

「よかった。それでどんな怪我してるの」

「それが分らないんだ。レントゲン撮ってるよ」

妻に聞かれて、始めて私は建夫がどんな状態なのかも知っていなかった。同級生が母親と一緒にレントゲン室からでてきたので、どうかと訊くと車のサイドミラーが顔に触れただけで、大した怪我でもないらしい。

「建夫さんは入院させたって、さっきお医者さんがいってましたよ」

「え、入院ですって、そんなに悪いんですか」

看護婦に教えられて、三階の病室にいったが入口に名札はなかった。ノックしてドアを開けると、ベッドが二つ並んで右側に建夫が寝ていた。もう一人は一年生位の少年で、祖母らしい人が付添っている。建夫は私の顔を見て安心したように微笑した。左の額にガーゼが張っている。

「どこか痛まないか」

私が聞くと、建夫はうなずいて、腕を動かさなければ痛まないという。どうやら肩を打ったらしい。

「お母さんと交代して、すぐきて貰うようにするからな」

「そういい残して病室をでると、私は緊張して固くなっていた身体が、いくらか楽になった。

でも、まだ一安心するには早すぎる。

最初の診察室にいつて医師に会った。

「左の鎖骨がぼつきり折れていますよ。しかし、問題は鎖骨なんかより頭の方です。交通事故で車にはねられた場合、頭を打つことが多いのですが、脳に損傷を受けた可能性を考えると、今動かすことは非常に危険です。レントゲンと、その後の患者の経過を見ながら脳の検査をしますが、今のところ絶対安静が必要です」

病院の外には救急車も警察官の姿もなく、私の自転車だけが、ぽつんと取り残されていた。私の頭には、今しがたまでの現実が、何だか架空の現象のように思えて、楚然と突っ立っていた。

事故の全容は次第に明らかになった。現場検証の警察官や、目撃者の話など総合すると、建夫とその同級生は、道路の向う側の友達の家へいこうとして、ガードレールの切れ目から、左右の安全を確かめずに道路に飛び出したという。

その時、左側から走ってきた乗用車が、先に飛び出した建夫を車の中央ではね、一步遅れた同級生を、右のサイドミラーではねた。

建夫は宙に一メートル舞上って、五メートルほど飛ばされて反対側の側溝の辺りまで転がった。同級生は道路の手前に倒れて、車はそのまま直進して、達夫の倒れている位置より先にとと停った。

その夜の私は興奮しているのか、仲々寝つかれなかった。医師のいった言葉が、強迫でもされていくかのように、繰り返し繰り返し頭の中を走行していた。

事故当日から、二日間というものは混乱に明けくれた。従業員の石田が頑張ってくれたのと、店が割合と閑だったので救われたといってもよい。

日に三回は自転車で病院通いのほかに、見舞客の応待、警察の事情聴取。小学校側との連絡。乗用車の運転者と保険関係との接触、目が回るような騒ぎである。

「車の事故はこわいなあ。今までびんびんして笑っていた人が、コロっと逝つちやうんだから。頭をやられると、本人でさえ気付かないんですな」

好人物そうだが、気に障ることを話す中年署員だった。

警察の交通課は、署の裏手の二階にあった。

窓から内庭の満開の桜が見渡せ、音もなく花がはらはらと散っている。私はふと浅野内匠頭の切腹のシーンを連想していた。辞世の歌が想いだせなくて苛々していたが、はつとして自分の置かれている立場に気付いた。

警察から帰る途中、今にも建夫がコロつと逝ってしまうような不安にかられ、無闇に自転車を飛ばしては、今度は自分が事故を起しそうになって冷汗をかいた。

警察で聞かされた話は、妻にはいえなかった。溝口外科での医師の話も、大分割引して話しておいた。妻をこれ以上心配させたとて何の得があるう。家に一戻ると、やつとのこと毎日行

き違いの夫婦の顔が揃った。

「何だって、左右を確認しないで道路に飛びだしたのかしら、横断歩道でないところを」  
妻が今更のように嘆いた。

「警察の調書だと、少し先の横断歩道で渡ろうとしたところ、自動車が停っていて動きそうもないので、また戻って現場で渡ったそうさ。あの道路は直線で見通しがよいから、子供が渡ろうとしているのに気付いたなら、なぜスピードを落さなかったのか、向うも過失があると思うよ」

「二人とも右側だけ見て、左側を見なかったのは不思議ね。建夫が先に飛びだしたので、あの子も釣られてしまったのかしら」

「車が直線に走ってきたのではなく、横道からでて、いきなりスピードを上げてきたという疑問もある。その時の目撃者がいないんだ」

こんな私たち夫婦の話も、事故が起つてからの返らぬ愚痴ではなかった。

通っている小学校の教頭のコメントに、当方の被害者側を憤慨させるものがあつた。さつそく駆けつけてきた、車の保険会社側のいい分を一方的にうのみにして、子供が横断歩道でないところからいきなり飛びだしてはねられた。学校では交通安全の指導を、全校生徒にきちんと実施しております。ということ、学校側の責任はないと間接的という。

「そんなセリフをいう前に、なぜ生徒や親の話の聞こうとしらないんだ。双方の話をしっかり聞

いて、また警察の現場検証を参考にして、初めてコメントするのが当然じゃないか。第一、自分の学校の生徒を信用してないんだ」

もう一人の同級生の父親が、私に向って怒っている。

建夫の身体の状態だけで、私と妻の頭はいつぱいになっていた。そのほかのことは視野に入っけても見えない聞えない。

「入院費用は自動車保険で払ってくれるんだらうなあ」

「そうでしょう。でも保険屋はこっちばかり悪くいっているから、何だか不利みたいね」

加害者である車の運転者は、ある音響機器のサラリーマンであった。病院の受付前で初めて会ったが、まだ二十代のおとなしそうな男だった。

私はこの男に対して、どんな態度をとるべきか気持が定まっていなかった。通り一遍の詫と、入院費用については決して迷惑をかけないからと強調して彼はいった。

私は入院費用の支払いが、どんな順序で行なわれるか、全く知らなかった。その時点では建夫の容態の心配ばかりで、お金は加害者と保険屋の問題とばかり思っていた。

加害者は石原という名前で、川崎市郊外のアパートに住んでいるというが、電話がないという。それに会社もストライキ中だという始末である。私は何となく不安になってきた。

会社の勤務中ではなく、私的な運転中だとすると、石原だけが直接の交渉相手となる。

三階の病室に私が顔をだすと、建夫は意外と明るい表情をしていた。

「どうだ。食べ物ほうまいか」

「うん、寝ていてもお腹はすくよ。じっとしているのが辛いから、早く退院させてよ」

「そうだろうと同情したが、これでも危険な状態という、医師の言葉を信ずるほかないのだ。骨をくつつけるんだ。それまで我慢しろ」

私は建夫の顔を見ながら、建夫が生れて一歳位の頃、危うく病死させるところだったのを思い出した。全身くまなく皮膚炎をおこして、丁度火傷のような症状で泣いて泣いて困った。幾つかの病院を訪れたが見当がつかず、塗り薬をくれるだけで途方にくれた。

幸い、勤め先近くの皮膚科で、すぐその病名と治療に確信のある診断をうけて、短時日で治った。手遅れになると、皮膚呼吸ができなくなつて死亡するという話を聞いて、私たち夫婦の肝を冷やした鮮烈な記憶があつた。

「今日の建夫は元気だつたらう。あの分なら後は鎖骨の手術するだけだね」

妻は毎日、数回は病院に通っている。商売をやりながらだから、暇をみて自転車で通っている。心配で店に居つけないようである。

「今日は下着を代えてやったわ。お風呂に入らないから匂うのよ」

私は細かいことは気がつかない。それぞれ役割が違っている。私は手術のことと、石原との交渉のことを考えていた。

ところが、また新たな火種というか面倒な問題が持ち上つてしまった。

その夜のことである。一人の中年婦人の見舞客があつた。顔なじみの店の客で、開店当時から顔刺にきている。建夫の事故をすでに店で聞いて知っている。

「実は息子さんの手術のことですが、ちょっとお知らせしておきたいことがあるのですが」

高橋と名のるその婦人は、真面目な表情でいう。店内に招じて妻と二人で向い合つた。

「鎖骨をつなげるといっても、切開するのは止した方がいいですよ。肩の辺りは色々な神経が通っているから、後で障害が起きやすいですよ」

「ほう。そうですか、私は簡単なことだと思つていました」

そういわれるまで、私は単純に考えていた。ちよつと切つて骨をつなげて閉じる。つながつたらまた開いて、金具をとつて閉じて完了する。煩わしいが専門の外科医がいうのだから仕方がないと思つた。しかし、神経を切断しやすく障害が残るといふのであれば、私も子供の将来のために考えざるをえない。

「ですから、私の知つている先生は、鎖骨は切開しなくてもつながる。自然とくつついてしまふというのです」

「その方がいいじゃない。痛い思いして障害があるかも知れないなんて心配するより」

妻はもう乗り気であつた。

よくよく婦人に聞いてみると、その先生というのは接骨医である。昔から骨つぎといわれる町の民間医療である。

「その先生にお会いになって、直接に詳しくお聞きになってみたらいかがですか」  
婦人の熱心にすすめてくれる気持は、私たちにはありがたかったが、その善意に対して疑問がない訳でもない。

婦人が帰ってから、私は少し腹を立てていた。余計な負担を負わせられた気持である。またまた何か起りそうな予感がする。

「いつてみようよ。あの高橋さん信用できる人よ、絶対に。聞くだけ聞いてみたら」  
なぜ、他人が絶対に信用できるんだ。私は更に腹を立てたが、ずるずると妻に引きこまれて接骨医と会うことにした。

溝口外科病院から五分ほどにその接骨院はある。外見は場末にあるようなオンボロ医院である。院長はこれも昔の柔術家といった方がよかった。ともかく説明をきいてみた。

「切る必要はなし、放っておいてもつくのだ」と力説する。私が脳の障害について話すと、「なあに、心配することはない」と簡単にいった。

私は妻と溝口外科まで、川を埋め立てて造った遊歩道を歩いた。兩岸は昔の桜並木である。花が散っている。私は桜吹雪を浴びながら、先日 of 警察署のことを思いだしていた。

『最初は風さそうだった。次で花よりもなほ、後がけふのなごりをいかにとかせん』そこまで思いだしていた。

私が黙っているの、妻も話かけなかった。

五、六人の幼稚園児が母親たちと、道いっばいにはしやぎながらくる。入園式の帰りなのか、興奮気味で私と妻にぶつかっていく。

「高橋さんは、なぜ熱心なのだろう。ただの善意からかな。後は接骨医の言を、どこまで信じられるかだ」

「私にも分らないわ。でも、決めるのは私たちよ」

「そうだよ。他人が何いつたって、どちらを選ぶかは親が決める。責任とるのは親なんだ」

溝口外科に近づくにつれ、私の頭はぎりぎり歯車がかみ合うような、奇妙な音をたてはじめた。

「もし失敗したら、親父は腹切りかな」

私のつぶやきを、妻が聞き返した。

「なに、世間の常識の裏をいこうと、これは勘だよ。理性より勘なんだよ」

妻は何のことか分らないように、首を振っていった。

「高橋さんを、信じてみましょう」

溝口外科の玄関に入ると、私は受付へ真直ぐにいき、肩は接骨に任せて貰いたいと切りだした。丁度いた医師が、うちも外科だからそれはできないと突っぱねた。

尚も斬りこむと、院長がでてきた。

「それほどいうのでしたら、切らないで整復しましょう。しかし、問題は肩ではない。頭の内

部なのです。前にもいった通り非常に危険な状態なのです。それでも接骨院でやるというのでしたら、最悪の場合でも当院は責任は持てません。それでもよろしいですか」

院長は五十代のひげの濃い青黒い顔で、どすのきいた話し方をする男である。

私の心の隅には、たじろいでいるものがある。建夫の命を握られている弱さがある。私はその場は一旦引き下がった。

病院の外にでると妻はいった。

「さつき高橋さんは、きつと院長は自分のところでやるといいだすだろう、といってたわ」

もう何日も放りっぱなしの店に、やっとたどり着くように帰ると、義弟が見舞いにきていた。妻の弟である。

自動車を運転しているので、事故の場合の必要事項をいろいろ教えてくれる。用心することはお金の問題で、絶対に自分で立て替えては駄目だという。相手に逃げられる場合があるというのだ。

川崎市石原と、どうやって連絡するかをまず考えた。彼のアパートに電報を打ち、スト中の彼の会社に電話をして、至急会いたいので連絡してほしいと頼んだ。

次の日、私はまた昨日争った受付に足を運んだ。事情を知っている無愛想な事務員に、うちの近くに転医したいので、入院料を計算してほしいと頼んだ。

三階の病室まで足が重くて、時々休みながら上った。ドアを開けると建夫しかいない。

「あの子供はどうしたの？」

「知らない。昨日の夜、何だか騒いでいた。眠くて見なかった。今朝いなくなっていた」  
死んでしまったんじゃないか。私の胸の心臓の筋肉が、急に掴みとられているようだ。

「実はね。うちの近くに転医することになった。あの篠田さんへね」

「てんい？病院を代わるの」

「うん、そうだ。その前に接骨院で骨を付けてもらおう。それからだ」

建夫は嬉しそうな顔になった。よほど心細かったのだろう。家の近くで、赤ん坊の頃から通いつけている医院だと思ふと、気持が楽になったのだろう。

「いつ？」

「これから話合う。いつになるか、まだはつきり分らない」

建夫は納得したようにうなづく。私が観察したところ、おかしな兆候は感じられない。でも、それは外見上のことだけである。

会計の清算書を見せてもらって、私はびっくり仰天した。四日間の入院にしては異状な金額だった。元より私は予備知識がないから驚いているだけかも知れない。

念のため事務長に説明を求めた。素人には注射だの室代だの計算について、何も分るはずがない。

ただ一つ分ったことは、金を払わなければ退院は認められないということだった。結局のと

ころ、自分で立て替えなければここをでられないのだ。義弟の言葉を思いだした。

その昼になって、やつと石原と連絡がついた。午後に病院の待合室で待ち合せたが、お金を持ってきていない。丁度、もう一人の同級生の両親がきて、三者で話し合った。やつと次の日、こちらで立て替えた分を返済すると約束させて、私はやむなく支払いを済ませた。万一の場合を考えて、用意しておいたのだ。

「レントゲン写真は貸せませんかね！」

建夫に肩をつかまらせて、そろりそろりと病室をでる私の背に、看護婦が吐き捨てるようにいった。

接骨院ではすぐ整復を始めた。屈強な若い助手が一人と、院長の奥さんらしい女性と私の妻、四人が建夫の手足を押えつける。

すでに写したレントゲン写真を、光に透せるように高くかかげさせて、離れた骨の位置を推定する。麻酔を使わず、院長は指先で骨を探り寄せていく。建夫の絶叫が始まる。

「痛い！痛い！待ってよ。少し待ってよ！」

「黙りなさい。少し黙りなさい！」

足を押えている妻も叫びだす。

「だって痛いんだもの。少し休ませて！」

院長は無視して、じりじりと折れた骨を押ししていく。建夫はひっきりなしに叫んでいる。

「我慢なさい。男の子でしょ。黙りなさい！」

見守っている私は、『叫べ！叫べ！』と心の中で叫んでいる。『叫ぶことが苦痛からの解放なら、思いつきり叫ぶがいい』

鎖骨はやつと一つにつながった。接着テープでしっかりと固定して、やつと整復は終了した。見ている私も、じつとりと汗をかいていた。

前もって予約してある篠田医院に、建夫を送りこんで、私はやつと一つの肩の荷を下した。まだまだ、後に続いている難関に心を残しながら店に戻った。

客のいない店内で、和代が石田とふざけていた。私の顔を見て、泣き笑いのような表情をする。

無理もなかった。私も母親もこの何日間、店を外に駆け回っていたし、関心は総て別のところに向けられていた。和代の相手は石田しかいなかったのだ。

「和代、サーカスやってあげようか」

「うん！」

和代は私を見上げてうなずく。一歳半にしては小柄で、いかにも赤ちゃんぽい顔をしている。「それ！いくぞ！」

私は和代の両手を掴んで、釣り上げようと構える。気合いを入れないと疲れが一気にでてるような気持がする。

「やつ！」と気合いをかけて宙に釣り下げると、和代の両足は私の胴に巻きつく。次が難しい。両手を離すと同時に、和代の腰に手を回すのだ。墜落の一瞬、和代は上体を反らせ気味にしないといないと、ずり落ちてしまう。

和代の腰を支えると、ぐぐぐつと和代は両手を伸して仰向けに地に着く位、反り返る。

「それ！」私は両手で和代の腰を支えたまま、自分の身体を反らせる反動で和代を引き起して終りとなる。ほんの三十秒もかからないかも知れないが、連続した動作で行なうのだ。

私の考案した遊びだが、お互いに信頼関係がないとできない。三回もやると疲れてきた。

「もうこれでお終い。またね」

私は奥の部屋に入って寝転がった。心臓の動悸が激しい。心身の疲れが一気に吹きだしたのかと不安になった。

妻が篠田医院から一戻ってきた。

「大きな病院で脳波の検査をした方がいいって、予約を取ってくれたわ」

「へえ、いつだい？」

寝転がったまま私は妻を見上げて訊く。

「五月の初めだって、それまで篠田さんへずっと入院させておくことになるわ」

「学校は当分休ませるより仕方ないか。何てあわて者なんだ。建夫の奴は」

事故が起つてから、建夫を責める気持などこれっぽっちもなかった。そんな気持のゆとりな

どあるはずもなく、次々に起る問題の対応に追われていた。

このまま、建夫は死んでしまうかも知れないという恐れが、頭の隅に少しでもあるうちは、私は妻にそのことを口にさせないで、胸の中でこらえているだけだった。

「あわて者もいいとこよ。あんなに見通しのよい道路で、大きな車が目に入らなかったなんてね」

「いくら急いでいたって、気配で感じるはずだぜ。きつと、見えていて忘れちまったんだ。忘れっぼいんだ！」

「まさかあ。もしかしたら何も見えないのに、車が忽然と出現したんじゃないかしら」

「SFじゃあるまいし、それなら向うも居眠りの目が覚めたら、車の前に子供がぱつとね」

一段落ついてほっとした気分か、軽口がとびだしてくる。妻も畳に寝転がって相手をしている。疲労こんぱいの果てといった図である。

「建夫の脳の方は、どうやら大丈夫らしいな」

「まだ油断はできないわ。検査が終るまで」

「なあに、俺の勘では何ともなさそうだよ。悪いことは、そういつまでも続くものか」

私はいつの間にか楽観論者になっている。そう思いこむことによつて、私ばかりか妻だって心身共に身軽になれるような気がする。

あの医料費の問題も、石原が溝口外科と接骨院と付いて回って払ってくれた。

次の日から私は、やっと落ち着いて店に立つことができた。

「この一週間、割合と店が暇で良かったですね」

従業員の石田が、久しぶりに顔を合せたようにいう。暇で良かったとはニクい挨拶である。その欠損分だけ、一生懸命に働いて取り戻さなければならぬ。四月の末から五月にかけて、気温が急上昇すると同時に、店の方も活気づいてきた。

働くことによつて、ささくれ立ったような神経も、次第に治ってくるようだった。

「やれやれだれ。平凡がいいよ。何もないのが。働くだけでもね」

一日の仕事が終つて、身体についた毛髪を払いながら、私は妻に向つていった。

「どういったとて、これも建夫の運命ね。私たちの運命でもある訳。軽く済んだだけでも感謝しなくてはならないわ」

私はまだ、妻のような心境にまでなれそうもない。私は部屋に上ると、王様の席にどつかりと腰を下して、テレビをつけようかつけまいかと迷っていた。